

優秀賞

## 鮎の季節に

岡山県 高木 由美子

私の夢は、学校の先生になることだった。小さい頃から変わらず願いつづけていた割に、たいした努力もせず、気がつけば十年も不採用通知を受け取る羽目になっていた。実家にお金も入れず、産休代員などで何とか過ごしていたが、さすがにこれではまずいと思い、次回を最後のチャレンジにしようと思つた。

その年、父のガンが進行し、あまり良くない状態となった。父は自由な人で、釣りとパチンコをこよなく愛していた。私が教師になるのは楽しみな様子だったが、プレッシャーをかけるようなことはなかった。十年もフラフラしている娘を心配してはいはずはなかっただろうが。

見舞いに行くと父は必ず「鮎が食べたい」と言った。釣りが好きな父は、鮎のシーズンになると必ず上流に釣りに行き、塩焼きを食べさせてくれた。あの味は今も覚えている。スーパーに並ぶ鮎とは全然違う。

父は糖尿病も患っていたため、食事制限があった。今思うと、余命わずかの人に食事制限もないだろうが、そのときの私は、危機感のなさと面倒臭さで、食事制限を理由に父の願いを無視していた。

あの日も父は「鮎が食べたい」と言った。私は「食事制限がある」と一蹴した。翌朝の電話で父が死んだと知った。採用試験前々日。突然の知らせだった。急かすように父を送った後、寝不足の頭と泣きはらした目で受けた試験に手応えがあるはずもなかった。

しかしその秋、私の手元に十年間待ち続けた採用通知が届いた。すぐに父の顔が浮かんだ。死ぬ前に鮎が食べたいという小さな願いも叶えてくれなかった親不孝な娘。その娘の人生最大の願いを、父はあの世から叶えてくれたのだと思つた。叶えてあげる相手がいなくなった願いが、宙ぶらりんのまま、私の心の中に今もある。とりあえず今年の夏も、スーパーの鮎の塩焼きを仏壇に供えよう。父はきつと許してくれるだろう。